

公共性のありかを探り意味と意図の関係を再考する

藤川 直也 (Naoya Fujikawa)

東京大学

『話し手の意味の心理性と公共性』において三木は、話し手の意味を話し手の意図に基礎付ける意図基盤意味論を批判し、その対案として、話し手の意味を話し手と聞き手による集合的信念の形成とそれに伴うコミットメントの観点から分析する共同性基盤意味論を提案している。

共同性基盤意味論の基礎となるのは、話し手の意味の公共性である。人は自分が意味したことに対する責任を引き受けなければならない。例えば「朝ごはんはコーンフレークが食べたい」と言ったならば、話し手はそれにふさわしい振る舞い（コーンフレークを出してもらったらもりもりと食べる、など）をしなければならない—少なくともそれにそぐわない振る舞いをする話し手を聞き手は正当に非難できる。言い換えれば、話し手は何かを意味することで、聞き手に言質を与えることになる。三木はこのことを話し手の意味の公共性と呼び、それが話し手の意味、そしてテイラーにならないコミュニケーションの本質的な特徴だと論じる(cf. p. 189)。

しかし、三木-テイラー的なコミュニケーション観に対して、それは限定的すぎると応じることも十分できよう。例えば、リスクを伴う内容を伝達する際に、話し手は、そうした内容を主張することで生じるコミットメントを避けるために、つまり言質を与えないために、非明示的な伝達的手段に訴えることがある（Camp 2018 はこうした伝達をほのめかし(insinuation)と呼んでいる。三木がテイラー事例と呼ぶ事例もこうした類の伝達の一例である）。ほのめかしのような伝達を一種のコミュニケーションと見るならば、コミュニケーションには、公共性を伴うものもあればそうでないものもある、ということになる。

公共性をコミュニケーションや話し手の意味の本質と見るか、公共性をもたないコミュニケーションや話し手の意味も認めるかという対立を、単なる用語上の問題にしないために、この発表では、後者の見方を取ることによって得られる理論的な見通しについて論じたい。この作業を通じて私たちは、話し手の意味やコミュニケーションにおける公共性の位置を見定め、共同性基盤意味論の射程を限定すると同時に、話し手の意味とコミュニケーションにおける意図の役割を再評価することになる。この見方によれば、共同性基盤意味論と意図基盤意味論は、対立する理論というよりも、相補的な理論として理解できる。具体的には以下の点を論じる。

(1) 公共性をもつコミュニケーションの典型例は、主張によるものである。また三木の議論が扱う事例は実際のところ主張に限定されている。すると一つの自然な見方は、共同性基盤意味論は第一義的には主張とそれがもつ公共性についての理論だと考えるというものである（主張をそれによって生じる責任や権利の観点から理論化しようというアイデアは Brandom 1983 や McFarlane 2011 で展開されている）。この見方のもとで

共同性基盤意味論を発展させる方向は少なくとも二つある。一つは、それを主張に関する動的意味論・語用論との関連で論じるというものである。ここでは、共同性基盤意味論を主張を一種の約束とみなす理論だと解釈した上で、主張を、共有基盤だけでなく、いわば話し手側の **To-Do** リストのアップデートをも伴う発語内行為として特徴づけるという立場を提示する。主張の中で話し手と聞き手の情報共有の次元と公共性の次元を区別するこの立場が示唆するのは、公共性は話し手の意味そのものの特徴ではなく、主張という発語内の力によって生じるものだ、ということだ。

もう一つの方向は、共同性基盤意味論を、主張ではない話し手の意味に応用する、というものである。話し手の意味には公共性を欠くものもあるという観点からすれば、こうした応用を試みる前にまず、対象となる類の話し手の意味が公共性をもつかどうかを検討すべきである。例えば、三木の著作において今後の課題とされている質問や命令(cf. p. 7)はその種の話し手の意味だろう。しかし推意についてはどうだろうか(推意はしばしば主張されたことではないとされる。cf. McFarlane 2011)。三木は、共同性基盤意味論が推意をどのように扱おうのかを手短かに論じている(pp. 223-225)が、目下の方針によれば、その前に問うべきは、そもそも推意は公共性をもつのか、という問題である。浅利の提題でも論じられるように推意が公共性をもつかどうかは論争含みである。私の考えでは、少なくともある種の推意は公共性をもたない(ほのめかしはそうした推意の一つである)。そうであれば、そうした推意に対して共同性基盤意味論を適用するというのは見当違いの方針であろう。

(2) 公共性を伴わないコミュニケーションや話し手の意味、たとえば、ほのめかしに関しては、意図基盤意味論による説明を試みることができる。そもそもほのめかしについては、それがまさに公共性をもたないがゆえに、たとえ意図基盤意味論は公共性をうまく説明できないという三木の議論が正しいとしても、意図基盤意味論による説明の可能性は排除されない。それどころか、Camp (2018)がいうように、ほのめかしが、少なくともその典型的な事例においては会話的推意の一種であるのだとすれば、それに対するグライスの説明が与えられるというのは十分にありうる。最後に、意図基盤意味論が依然として生きた選択肢であるということを示すために、自己言及的意図の不可能性に依拠した意図基盤意味論に対する三木の反論を、Barwise and Etchemendy (1987)の意味論に基づいて批判的に検討する。

Barwise, J. and J. Etchemendy (1987). *The Liar: An Essay on Truth and Circularity*. Oxford: Oxford University Press.

Brandom, R. (1983). Asserting, *Nous*, 17:4, 637-650.

Camp, E. (2018). Insinuation, Common Ground, and the Conversational Record, in Fogal, D., D. W. Harris, and M. Moss (eds.) (2018). *New Work on Speech Acts*, Oxford: Oxford University Press, pp. 41-66.

MacFarlane, J. (2011). What is assertion? In Brown, J., and Cappelen, H. (eds.) (2011). *Assertion: New philosophical essays*. Oxford: Oxford University Press.

三木那由他 (2019). 『話し手の意味の心理性と公共性—コミュニケーションの哲学へ』、勁草書房